

# 初代大使の見たエチオピア

## —徳永太郎著『管内視察旅行報告書』に寄せて—

栗本 英世

徳永太郎氏は、1957年末に、アディスアババに創設された日本公使館の初代公使として赴任された方である。公使館が、翌年大使館に格上げされるとともに大使に任命され、1961年までその任にあった。在任中、自動車でエチオピア国内をくまなく旅行し、さらには独立前のソマリアにまで足をのばされたおりの詳細なレポートが、『管内視察旅行報告書』と題された、手書きの分厚い私家版の記録として残されている。この原本は、国立民族学博物館に寄贈され、図書室に収蔵されている。この小論では、その経緯にふれつつ、報告書の紹介をおこないたい。

『報告書』は、10の章から構成されている。第1章は、1958年10月16日から2週間にわたる、ウォロ州の州都デシェと、古都のアクスムとゴンダールを巡る旅の記録である。全走行距離は、3,617キロメートル。以下、コカ・ダムとウォンジの製糖工場（2章）、イルガム（シダモ州）とジンマ（カファ州）（3章）、アワッシュとガンベラ（4章）、アドラの金鉱（シダモ州）（5章）、ハラール（6章）、ハラール、オガデン地方から、イタリア領ソマリアのモガデショ（7章）、青ナイル（8章）、ダンカリ砂漠とアッサブ港（9章）と続く。最終章の10章は、アクスム王国に関する概説である。

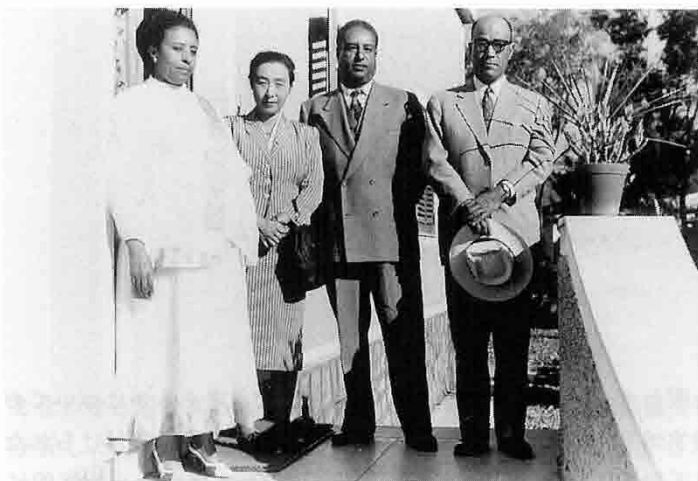
このように、徳永大使の足跡は、エチオピアのほぼ全域におよぶ。2万キロメートルにおよぶであろう全行程のおおくは、大使自身が自動車を運転されている。当時の道路や宿泊施設の状況を考えれば驚異的である。30数年をへた現在でも、これだけ広く、エチオピア各地を踏査した日本人は数少ないであろう。

『報告書』の分量は、400字原稿にすれば、400

枚ほどである。それに大使が撮影された300枚の写真、絵はがき、手書きの地図などが添付されている。この『報告書』は、さまざまな意味で貴重な資料であるといえる。まず、当時のエチオピアの政治、経済の状況、地方における民情が、如実に描かれている。また、旅行には他の在留邦人が同行することもあった。大使館員ばかりでなく、当時宮廷に勤務していた日本人女官、皇帝の顧問であった池田純久元海軍中将などである。当時の日本人コミュニティの一端をうかがい知ることができる。さらに、援助活動に従事する欧米人、軍事顧問のアメリカ人将校、エチオピアに根付いたイタリア人なども登場するのも興味深い。

報告書を魅力あるものにしてしているのは、なによりも、徳永大使の旺盛な知的好奇心である。その好奇心の対象は幅広く、かつわけ隔てがない。州知事といった政府の高官から、道中で出会う牧民や農民まで、あるいはダム建設や製糖工場といった国家プロジェクトから、砂漠で岩塩を掘る商人まで、そしてエチオピアの多様な自然景観までが、等しく大使の関心をとらえた。また、エチオピアの歴史や文化について、じつによく勉強されていることにも驚かされる。その成果も報告書の随所にちりばめられている。1950年代末に、いったいどんな文献を読まれたのか、興味のあるところである。

徳永氏は、外交官として戦前、戦中、戦後の困難な時代を生き抜かれた。その経歴には、日本という国家の現代史の縮図をみる思いがする。1908年（明治41年）、福岡県のお生まれで、旧制福岡高等学校をへて、東京帝国大学法学部を卒業後、1931年（昭和6年）に外務省に入省された、エ



ゴンダール州総督夫妻と徳永夫妻、1958年10月23日撮影。

リート外交官であった。第二次大戦中は、在ドイツ日本大使館の書記官、ベルリン総領事などを勤められたが、結核に冒され、スイスで療養生活を送られている。戦後はそのまま任地に残留し、夫人とともにアメリカをへて帰国されたのは1948年であった。戦後は再度のドイツ勤務、エチオピア勤務のほか、ベネズエラ大使、外務省研修所長、チェコスロバキア大使を歴任し、1968年に退官されている。

私が、徳永夫妻にはじめてお目にかかったのは、1993年6月末のことだった。エチオピアやベネズエラで収集された民具や工芸品を、国立民族学博物館に寄贈されたいとの申し出があり、日本エチオピア協会事務局長の嶋田影章氏とともに、鎌倉の鶴ヶ岡八幡宮門前の閑静な住宅街にある御自宅を訪問したのだった。嶋田氏とともに御夫妻と歓談したのは、忘れられない思い出のひとつである。その折に、『管内視察報告書』も見せていただいた。

徳永太郎氏は、その年の11月におなくなりになった。享年85歳であった。翌年になって徳永下枝夫人から、『報告書』を私に手渡したいとお便りをいただき、ふたたび鎌倉におうかがいした。御夫妻の思い出のつまった貴重な品をいただくのは躊躇された。『報告書』の写真には「トンちゃん」と「シー子さん」という愛称で、しばしば夫人が登場する。おふたりの仲むつまじさが、

よくうかがえる。しかし、夫人の決心は固く、私は夫人の御好意にあえて甘えることにした。そして私個人ではなく、国立民族学博物館の図書に寄贈していただくということで、申し出をお受けすることになったのであった。

戦後の高度経済成長の時代に育った私にとって、徳永御夫妻はとても魅力的に感じられた。魅力の原因は、平凡ないまわしをすれば、戦前に育った日本人の気骨と品格だといえるかもしれない。それは、戦後育ちからは、感じられることの少な

い種類の人格である。私はみたび鎌倉のお宅におじゃましているが、大正2年生まれの下枝夫人とは、いつも時間のたつのを忘れて歓談させていただいている。長い外交官生活のなかでも、とりわけエチオピアは、御夫妻にとって愛着のある国であつたらしい。社会主義時代に調査をはじめた私にとって、革命前の帝政時代の話は、たいへん新鮮で興味深いものだ。しかし、エチオピアへのつきない思えばかりでなく、夫人が現代の世界情勢についても深い関心があり、機知にとんだコメントをされることに、いつも驚かされるのである。ソマリアにたいするアメリカの軍事的介入を「おっせかいの押し売り」と一刀両断されたときには、私は膝を打って同感した。

さて、夫人によれば、『報告書』のコピーは、在エチオピアの日本大使館と、外務省の本省にも寄贈されたとのことだ。しかし、現在どういう形で保管されているかは不明である。国立民族学博物館の図書に保管されることになった『報告書』が、エチオピアに関心のある方に広く利用されることを願いたい（閲覧希望の方は、栗本まで御連絡下さい）。また、なんらかの形で『報告書』が出版できないものかと考えている。

最後に徳永下枝夫人の御健勝をお祈りして、この小論の結びにかえたい。

(くりもと えいせい 国立民族学博物館)